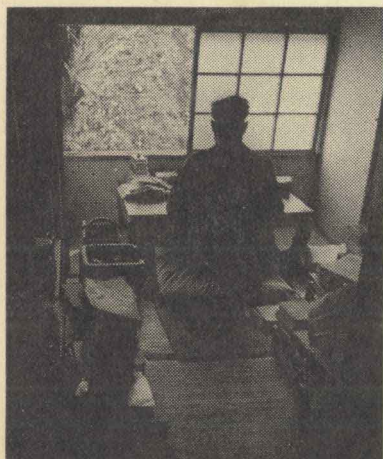


中山義秀全集

第六卷



朝雲暮雲
新劍豪傳
塚原卜傳

新潮社版

中山義秀全集

第六卷

新潮社版



© Tetsuya Akada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1971. Printed in Japan.

中山義秀全集 第六卷

發行 昭和四十七年一月十日
セット版 昭和五十一年八月三十日

セット定價 二七〇〇圓

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六一五一、編
集二六六一五四一一、郵便番
一六二、振替東京四一八〇八

印刷所 塚田印刷株式會社
製本所 神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第六卷 目次

朝雲暮雲

五

新劍豪傳

一五

諸岡一羽の三人の弟子

一五

伊藤一刀齋

一九

林崎甚助重信

二三

齋藤節翁

二五

塚原卜傳

二六

*

解説

進藤純孝 五七

解題

五六

中山義秀全集 第六卷

朝雲暮雲

落城

元和元年五月七日、陽曆六月三日の朝である。

夜はまだ、すっかり明けはなれてはゐない。朝霧が、ふかくたちこめてゐる。

天王寺前に陣取つた、毛利隊の先鋒から、二人の若武者が物見にでた。

二人とも素肌の亂髮姿で、太刀を手にさげてゐる。彼等は丘の高みにのぼつて、野邊を見渡した。

東は若江、八尾の村々である。南は平野、住吉。

前日、若江表の戦で、木村重成が討死した。道明寺口では、薄田隼人、後藤又兵衛が戦死してゐる。

今日が、決戦の日だ。大坂方七萬、關東方二十萬。互に精銳をつくして、初夏の野を血に彩り、今生の運命をさだ

めようとする。

夜半の雨で道ばた、丘の窪みにところどころ水溜りができ、沼池などもある。さうした場所に、一々、紙片をはさんだ、篠竹がさしてある。

味方がたてたものか、寄手がしたものか、人馬の足場を警戒するための目じるしであらう。

東西かけて、眼前四、五里の廣さである。霧のうすれゆくにつれて、野末に村里や森木立が、おぼろに浮んできた。ふだん見馴れた景色より、村や森の数がふえてゐる。ほとんど野を蔽ふばかり、と評してもいい。

二人の若武者は、眼をみはつた。それ等の村々や森木立が、こなたへ向つて、ゆるぎだしてくるやうに、思はれたからである。

「やつ、彦作、村が歩くわ」

「おう、森も動くぞ」

二人は、思はず、息をのんだ。朝風が二人の亂髮を、後へ吹きなびかせてゐる。

彼等は知らず識らず、丘の端まで進み出て、野末を熟視した。

歩くと思はれた村は、敵の兵團である。動くと思えた森は、敵が空にかざした旗、指物や長柄の槍であつた。

昇りだした朝日をうけて、槍、薙刀の刃がきらめきわた

り、すすきの穂が、野邊いちめに咲きだしたか見える。
東は若江、八尾、南は平野、堺路、三里の間、敵の人馬にうづめつくされてゐる。二人は、身ふるひした。

「彦作」

「小彌太」

二人は顔を見あはせて、異様な笑を洩した。

「備へに歸つて、酒をくまう」

戦は、七日の十時から始つた。徳川のはうから、槍襖をつくつて突掛つて行つた。

豊臣方は、銃をかまへて地に折敷き、満を持して待つてゐた。眞田幸村の戦略では、兩軍が混戦になつた頃を見はからひ、別動隊をもつて、敵の背後をつかしめる手筈になつてゐた。

しかし戦は、なかなか計畫通りにはゆかない。兩軍の先鋒部隊は、彼我の間九町ばかりを隔てて、午前七、八時頃から相對峙し、ともに殺氣だつてゐる。指揮者の號令で、たやすく動かせるやうな勢ではなかつた。

天王寺口、徳川方の先鋒は、本多忠朝である。忠朝は、平八郎忠勝の息子だ。去年大坂冬の陣に家康から父に似ぬ不肖の子だと嘲られ、臣下共々斬死にを覺悟してゐた。

猪突した忠朝の兵は、毛利隊の銃撃にあつて、たちまち七十餘人が戦死した。それと同時に、彼の軍は毛利四千の

兵に、左右から挟みうちにされ、總崩れになつた。

主將の出雲守忠朝はそれと見ると、百里といふ駿馬に鞭うつて、馬廻りの徒士二十人あまりをひきつれ、敵の唯中へ斬込んだ。

毛利隊の物頭、徳永甚右衛門以下七、八人、よき敵とばかり忠朝をおしついで、四方八方からうつてかかる。

鐵砲頭雨森彦作は、心利いた若武者であつた。歩卒の銃をとつて馬上に奮戦してゐる忠朝の眞前、二間ちかく進みよると、下から狙ひをつけ、忠朝の鎧越しに二つ丸を撃ちこみ、臍より背中へつらぬき抜いた。

馬上にたまらず、眞逆様に落馬すると、

「それ、首とれ」

と多勢がおそひかかる。忠朝の郎黨、大屋作左衛門が主をかばひ、三尺餘の大太刀をふるつて敵を近づけない。

雨森の同僚、松前小彌太が長柄の槍で、この敵を辛辣にした。

「彦作、お手前の手柄だ。出雲の首を擧げられい」

彦作は笑つて頭を横にふつた。

「俺はそんな物いらぬ。お手前の手柄にしる」

「な、ぜだ」

「兜首の一つ二つとつてみたところで、この戦が味方の勝に、なるわけでもない」

「悟つたことをいふな。お前がとらぬなら俺が貰はう。ついでに、これも貰つておけ」

小彌太は忠朝の首を斬つて、腰に結びつけると、さらに忠朝の兜や、黄金作りの太刀、脇差を自分の物とかへた。

「これで俺も、あつばれ大將らしくなつたらう」

「うむ、見事なものだ」

「この戦に勝ちさへすれば、俺達も一國一城の主となる筈だつた。くそ、いまいましい」

小彌太は忠朝や作左衛門の屍を、小溝の中へ蹴とばした。「戦へるだけ戦ひ、殺すだけ殺してやる」

彼は長槍をとりあげて、血ぶるひした。

毛利隊その日の奮戦は、大坂方随一といつてよいほど、目ざましかつた。

茶臼山前に陣をしいた、眞田幸村の赤旗の備へとならび、毛利隊は全軍白旗をつらね、眞田が紅ゐの花なら、これは吹雪のやうに、關東軍におそひかつた。

本多忠朝を討取つた勢ひにのつて、二陣にひかへた小笠原秀政、保科正貞等の軍の側をついた。このため秀政父子三人は、重傷を負ひ戦死した。保科正貞もまた、討死した。

毛利隊はさらに、眞田と戦つてゐる、越前兵三萬の大軍の中へ、突き入らうとした。秋田、立花、淺野、仙石などの諸隊が、これをさへぎらうとしたが、決死の軍兵の鋭鋒

には敵しない。みな敗れてしまつた。

しかし、その間に、眞田幸村、大谷吉久は戦死し、毛利隊は後方の連絡を絶たれて、敵中に孤立した。

勝永は残兵をまとめて、城へひきあげようとする、藤堂高虎の兵が追撃してくる。

毛利隊は道に地雷を伏せて、藤堂隊をやぶつた。すると今度は、越前兵が尾撃してくる。

勝永四千の兵は、もはや残るところ百にみたくない。その中の七、八十人が返戦して、越前兵を蹴ちらした。

勝永、永俊父子を守護する兵は、わづか二十人ばかりである。雨森彦作、松前小彌太も、まだその中に生きてゐる。

兩人とも、さんさんの體たらくである。亂軍のうちに奮戦してゐる間に、兜は吹飛び、具足、帷子かたびらもちりぢりに、ひきちぎれてしまつた。

小彌太は、せつかく奪ひとつた忠朝の兜や首を、途中でうちすててしまつてゐた。片眼をつぶされ、手足から血が滴りながれてゐる。槍の櫓柄は、なかばから折れてゐた。

彦作も同様であつた。彼は額を刀でうち割られ、鉢巻で傷をつつんでゐた。腿に槍創をうけて、跛をひいてゐる。

「彦作、創は大丈夫か」

「おう、小彌太、貴様、眼をやられたな」

「片眼でも、残つてをればいい。貴公、これから、どうす

る」

「どうするつて？」

彦作はあやしむやうに、小彌太をながめた。

「かうなりや、秀頼公のお供をして、主君ともども城内で、腹をきるより仕方がないぢやないか」

「俺は、いやだな。俺達は譜代の家來でもなし、腹をきつたところで、それっきりの話だ。これだけ働けば、申譯がたつ。此處を落ちて、時節を待たう。なア彦作」

彦作は黙つてゐる。

「俺達は、まだ若い。今までは夢中で戦つてきたが、助かつてみると、急に命が惜しくなつた。負け戦で、死にたくはないわい」

彦作は黒門口から、城内へ入つてゆく、勝永父子の姿を、眼でおひながらいつた。

「ともかく城へあがつて、主君の先途を見とどけよう。落ちるのは夜になつてからでも遅くはない」

大坂方の敗兵が、關東勢に追撃され、後からぞくぞくと城門口に、なだれこんでくる。それ等におされて、落ちるにも落ちやうがない。

小彌太はよぎなく、彦作を助けながら、三の丸へ入つた。三の丸には、大坂方諸將の居宅や、士卒の小舎、長屋がある。

それ等に住んでゐる家族達が、今や落支度にいそがしい。衣服、金銀、飾物などを、身につけるだけつけて、遁げようとしてゐる。

三の丸、二の丸の疊壁や障は、冬の陣の後、まつ平に埋め壊されてしまつた。こんどの戦争準備で、障の土をあげ、塀柵などを設けたけれども、急場のしのぎにすぎない。

敵兵が引揚げてくる大坂兵の後を、つけ入りにして城内へまぎれこみ、はざま、木柵へ攻寄せてくるが、誰あつてふせぐ者がゐない。

さしに廣い大手前廣場も、數千萬の敗兵、家族、敵兵などが右往左往して、ごつた返してゐる。そこへ、敵の砲彈が落下してくる。味方からも、大砲をうちかへす。

そのうち三の丸の所々へ、火の手があたりだした。つけ入りの敵兵が、諸將、士卒の居宅、物置、厩、所きらはず火を放つたためである。

その火の手をみて、關東兵が廓の木柵をのりこえ、我も我もと侵入してくる。敵と相討つ者、逃げる婦女子をひとつとらへ、金品を奪掠する者、物蔭へひきずりこんで姦す者、小兒の號泣する聲、劍戟の音、銃火の響、城内はたちまち修羅の巷と化した。

やがて、二の丸にも火がついた。大坂方の主將、大野修理治長の居第が、黒煙を夕暮の空にたなびかせ、紅蓮の焰

をはいてゐる。

その中から味方へむかつて、鐵砲をうちこんでくる者がある。秀頼麾下の七將の一人、伊東丹後守が心がはりして、屋敷にたてこもつたのだ。

つづいて、本丸にも火の手があがつた。かうなると、三の丸、二の丸、本丸の三里四方城内いたるところ、上を下への混亂である。宇内無比とうたはれた堅城も、内外呼應しての攻撃には、手のほどこしやうがない。

大野修理の弟、主馬治房、伯父道丈、仙石宗也達は、秀頼をすてて城をおちのびた。太閤から黄母衣^{オウモロイ}をゆるされた、拔群の勇士郡主馬は、天守臺下の千疊敷へきて甲冑をぬぎ、子息の兵藏と共に、秀頼に暇をつけて腹をきつた。

同じ七將達の眞野豊後、中島式部少輔も、郡主馬父子にならつて、いつしよに自殺した。堀田伊豫や堀田圖書は、猛火のため本丸へ近づくことができずに、二の丸の橋の上で腹をきつたり、また自宅で妻子と共に自滅したりした。淀君、秀頼母子は、大野治長はじめ從臣侍女數百人につきそはれて、五層の天守閣内にこもつてゐた。ところが、千疊敷にも火が燃え移つてきたので、速水甲斐守にすすめられ、天守閣を下つてきた。毛利勝永父子も、それに従つてゐる。

雨森彦作、松前小彌太の二人は、主人の後を追ひ大掛か

ら櫻御門をすぎて、本丸へたどりつくと、創の手當をしなから天守閣に入つた勝永父子の現れるのを、じつと待つてゐた。

ともかくも勝永の指揮をあふぎ、その先途を見とどけてから、その後の行動をきめようといふ肚である。小彌太も、本丸まで来てしまつた以上、友一人をすてて落ちのびる氣持はない。

障、石垣、堀、櫓にとり圍まれた、高さ百五十尺の本丸内の各廊には秀頼麾下の兵をはじめ、宿將の軍兵が充滿してゐた。

本丸に火がおこり、宿將等の自殺や逃亡がはじまると、軍兵もわれがちに本丸を落ちて行く。中には主に殉じて腹をきり、猛火の中へ飛込むものもないではない。勝永の從兵等も、いつか姿を消してしまつてゐた。

勝永は出迎へた二人の姿をみて、いささか意外に思つた様子である。

「お身達はまだ、ここに残つてゐたのか」

「はつ何かご用でもあらうかと、思ひまして」

彦作が、兩手をついて返事をした。遺言はないか、といふ意味である。

毛利豊前守勝永は、五十餘歳になる。もとは九州小倉、六萬石の領主であつた。關ヶ原の役に石田側にくみして領

土をのぞかれ、土佐の中村へ配流された。

大坂役のおこる前、秀頼の檄をうけ、小舟で土佐を脱出してきた。彼の妻は濱まで見おくつてきて、父子の門出をはげました。その時以來、決死の覺悟である。

彦作、小彌太の兩人は、大坂に戦争が始まると聞いて、全國から馳せ集つてきた浪人である。關ヶ原の殘黨、切支丹宗徒、山氣や金につられた、失職の雜人ばらにすぎない。たまたま、勝永の配下に編入された關係だけであるのに、負け戦に奮闘したばかりか、最後まで主人についてきてゐる。

勝永は、二人の律儀さに、感動した。見所のある侍達と思つて、二人を物頭にとりたててゐたが、これほど頼みがひがある男等とは知らなかつた。

勝永は、彦作の手をとつて云つた。

「いかに兩人、お身達をみこんで、しかと頼みたい事があ
る。僕の遺言ぢやと思つてひきうけて貰へまいか」

「及ばずながら——」

二人は、同時に頭をさげた。

「これから秀頼公の御臺所、千姫殿が落ちてゆかれる。御臺様は大御所家康の孫、將軍秀忠の娘であるから、關東方でも疎略にはあつかふまい。秀頼公御母子の、お命乞ひのためぢや。ただ萬一命乞ひが失敗した場合、氣づかはれる

のは、秀頼公の二人の若君達。これは千姫殿のお腹から生れた方ではない故、落し申してもつかまれば、むざと助けてはおくまい。それをお身達に、護衛して行つてもらひたいのぢや」

二人は、顔を見あはせた。

「さやうな大役が、手前共に勤まりませうか」

「いや、おふた方にはそれぞれ、附添ひの侍や乳母達がある。それ等を二人して、敵の手にわたらぬやう、蔭ながら守護してもらへばよい。お身がたのやうな勇士に、見送つてもらへば、僕も何より心強い。これは、僕の形見だ」

勝永は長刀を彦作に、脇差を小彌太にあたへ、べつに路銀をつつんで、二人に頭をさげた。

「頼む、頼む」

二人は主人に頭をさげられて、ひきうけない譯にはゆかない。

「畏りました」

「では、これへ直ぐ、まめられる。彦作は姫君、小彌太は若君。忘れまいぞ」

「豊前守には、これよりいかが遊ばされますか？」

「秀頼公のお供をして、蘆田曲輪に火をさけ、關東方よりの吉左右を、待つばかりぢや。だが、恐らくそら頼みに終るであらう。老獪な家康が、いまだら助命の願を、ゆるす

はずがない。これが最期だ。眞田、後藤、木村、みな先に逝かれた。僕も思ふほどに戦つたから、もはやこの世に心残りはない。お身達の辱けない志を、冥途の土産にして、倅といつしよに死んでゆくわ、あははははは」

勝永は猛將らしい高笑ひを、あたりにひびかせた。落城も死も、屁とも思はぬ面魂である。火事の焰の反映で、うす闇の中に照しだされた勝永の笑顔を、二人はじつと見まもりながら、頭をたれた。

秀頼の若君國松と、姫君の豊姫が、腹巻姿の武士の背に負はれ、天守閣から出てきた。それに侍や侍女たちが、ぞろぞろとついてくる。

いづれも顔色がかはり、眼が上ずつてゐる。若君達よりも自分等の命が助かりたさに、附添ひを口實にして、城をおちてゆくつもりらしい。勝永も心もとなく思ふものだから、二人に供奉を頼んだのであらう。

南方の櫻御門には、敵兵がせまつてゐた。落ち口は、北の山里御門一方しかない。内陸にかけられた極樂橋をわたり、二の丸の京橋口から、淀川の京橋、天満橋を渡つて、城外へ遁れる。

家康は城の搦手にあたる、この北の遁げ口を、わざとあけておいた。城の四方をとざして袋の鼠にすれば、窮鼠かへつて猫をかわ勢で、味方の被害がそれだけ大きくなる。

しかし、まるで無勢にしておいたわけではない。京極忠高、石川忠總の兵が、京橋先の備前島にをり、池田利隆の兵は、海路から船で、天満、中島を守備してゐる。

これにたいして城方から、三千ほどの兵が討つて出たが、野口の堤で敢なく潰えさつた。ただ二十萬の大軍が、たむろしてゐる東西南の三方面より、兵力の少いこの北の口が、まだしも落ちやすい。それで萬におよぶ落人が、この口へ殺到した。

城の高みから見おろすと、京橋、天満のあたり、まつ黒に、群集がうごめいてゐる。

橋を渡りきれないで、淀川へ飛びこむ。泳いで向う岸にゆくつもりなのだが、着ぶくれた上、財寶を身につけてゐるので、水に流され、溺れ死ぬ者が、数かぎりなくある。

落人の群は、すべて半狂亂の態であつた。我先に逃げださうとして、前後の分別をうしなつてゐる。

せつかく向う岸についても、敵の手に捕へられ、財寶を奪はれる。男は首をはねられ、女達は陣所へひつたてられてゆく。

すでに、夜であつた。火は城内ばかりでなく、市街の東西南北にあがつてゐた。

市街には、秀吉の時代に造營された、諸侯の邸宅があつた。それ等に、馳せあつまつてきた、大坂方の浪人や、妻

が住んでゐた。

そこで、今掠奪がおこなはれてゐる。掠奪と殺人と婦女強姦は、戦争のつきものだ。

火は敵が放つたのか、それとも落ちてゆく大坂兵が、身を晦すためにしたのか、黒雲を描いて空に舞ひあがり、敗戦の地獄圖を照しだしてゐる。

天守閣をでた國松、豊姫の一行は、本丸埋御門、御多門、山里御門をすぎて、極樂橋をわたり二の丸にうつる頃から、しだいに離れ離れになつてきた。

闇にまぎれて落ちてゆくのに、多人數では人目にたつ。別れ別れになるのは、致しかたがない。

「彦作、先へゆくぞ」

小彌太が、彦作に別れをつげた。

「おう、ずあぶん、たつしやで……」

「生きてをれば、又會ふこともあらう」

「お互に、さうありたいものだ」

「貴様、死ぬにも、死ねなかつたな」

「べつに、死ぬことを、急いでゐたわけではない」

「さうだとも、生きるだけ生きて、世を思ふままに渡るのだ」

小彌太は、六尺ちかく上背がある。彼は、敗戦に屈してゐなかつた。片眼をつぶされ、槍の柄が折れるほど戦つて

も、まだ意氣軒昂としてゐる。勝永が國松君の護衛に、小彌太を名ざしたのは、彼の逞しさを見たからであらう。

彦作は小彌太にくらべると、小兵であるが、身體つきは骨太で、がつしりとしてゐる。彼は手槍を、杖にしていた。跛をひいてゐるが、まだ戦ふ氣力は、失つてゐない。

「城外へ出ると、敵があるぞ。彦作、その創で、大丈夫か」

「大丈夫だ。俺は敵の大將を、撃ちとめた。雑兵ばらの手には、かからない。小彌太、貴様こそ血氣にはやつて、仕損ふな」

「合點だ。五人十人の敵なら、突きくづして通げる」

「落ちるのは、京か紀州口だらう。早く行け」

「おう」

小彌太は槍をふり、躍りあがるやうにして、國松君の後を追ひ、闇に消えた。

侍臣の背に負はれて、城をぬけでる國松は、數へて八歳、豊姫は七歳である。まだ、あどけないといつていい齡ごろだ。

秀頼は十一歳の時、家康の命で秀忠の娘、七歳の千姫と結婚した。それから十二年たつが、二人の間に子供はなかつた。

國松と豊姫は、幾人かあつた秀頼の側室たちの中、成田

助直の娘の腹にできた兄妹だと、傳へられてゐる。千姫の父の將軍や家康の前をはばかり、京極忠高の家にあつてゐた。

若狹の國小濱の城主、九萬二千石、京極忠高の母常高院は、淀君や秀忠の妻と姉妹である。また彼の妻は、秀忠の娘初姫であるから、忠高は秀頼と従兄弟同士であると同時に、秀忠の相婿でもある。

忠高は、元和の年、二十歳であつた。大坂の戦がおきると、忠高は徳川方だったので、國松と豊姫は大坂城内にひきとられた。

兄妹ははじめて、父のもとに歸つたと喜んだのも束の間、僅か八、九月足らずで、ふたたび城を落ちのび、さすらひの身となる。

國松と豊姫の一行は、京街道を目ざして落ちて行つた。

京都は、京極忠高の生れ里である。兄妹の育てられた、忠高の屋敷もそこにある。

また秀吉や秀頼が、寺領や金銀を寄進した、寺社佛閣もすくなくない。

紀州路の高野山、吉野、熊野などは隠れ忍ぶには屈強な場所だが、途中があぶなかつた。敵の大軍が本營を擁してすき間もなく陣をはつてゐる。

京街道の入口を扼してゐるのは、京極忠高、石川忠總等

の兵である。みつけられた場合、幸ひにならぬともかぎらない。二の丸の城門を忍びでると、廣場はいちめん、死體でうづめられてゐた。甲冑、武具、衣服をはぎとられ、ほとんどみな裸だつた。

その中には、まだ死にきれずに斷末魔の聲をあげて、うめいてゐる者や、銃火につらぬかれ、刀槍に傷つけられて大地をのたうち回つてゐる者がある。あるひは猛火に焼きたてられ、敵の雑兵に追はれて、赤裸で狂ひ走つてゐる女や子供の群。

悽慘、眼をおほふやうな光景である。市内いたるところ、同様な情景を、現出してゐるに違ひない。

落人等の阿鼻叫喚の音、彼等を追撃して、首を斬つたり、掠奪したりしてゐる、戦勝兵の野獸のやうな咆え聲、それに加へて城内や市街の家屋の焼け落ちる響、風の唸りや火の流れ、それ等が地鳴りか遠雷のやうに、闇の中に聞えてくる。

天満橋につづく長柄堤、京橋につづく野口堤の上は、落人の集團で、まつ黒に人なだれがしてゐる。

集團となると、關東兵も迂闊に手がだせない。彼等は、いづれも必死だつた。降伏すれば、掠奪された上、殺されるにきまつてゐるから、抵抗が激烈だ。巖壁をつらぬいても、落ちのびようと必殺の氣をこめてゐる。

敗兵は烏合の衆だ。ぶじに落ちのびても、據るところはない。日本全國、大御所の旗風のなびく所、いづれは搦めとられて、處刑されるのがおちだ。

京極、石川、池田等の兵も「命あつての物種子」と思つてゐるから、無理はしない。強いとみれば避け、弱いとみれば襲ひかかつて、物の具を割ぎとる。もつともよき武者、よき獲物とみれば見遁しはしなかつた。

國松や豊姫は、敵にとつては、何よりの獲物である。秀頼の公達とわかれ、莫大な恩賞ものだ。先に行つた國松達は、群集と闇にまぎれ、蒲生まで來た。

ホッとして一息ついてゐると、村の家蔭から、七、八人の兵が現れて、一行の前後をとりまいた。皆どぎどぎする、槍、薙刀、拔身などを持つてゐる。

「待て」

その聲で、侍女たちはへたへたとなつた。殿中の生活しか知らないのだから無理もない。

「大坂方の落人達とみた。おとなしく、縛につけ」

さういふ間にも、はや女達の手をとつて、ひつたてる者がある。女たちはふるへながら手をあはせ、聲もでない。

護衛の武士達は、秀頼の手兵である。今日の戦に参加しなかつたが、流石にたちろがなかつた。數は、僅に三人。多勢ゐた附添ひの者は、途中いつの間にか、姿を隠して

ゐた。持てるだけの金銀を、身につけてゐるから、闇を幸ひ、思ひ思ひの方向に、逃げ散つてしまつたのであらう。國松についても、先の見込はなく、反對にそれだけ危険も多い。

「喧しい」

その時、敵の後から不意に現れて、二、三人を槍の穂先で、横なぐり、あるひはたて割に、叩きつけた者がある。

「後は、俺がひきうけた。遁げろ」

國松を負うた武士が、最初に遁げだした。後の二人は敵をひきうけ、逃げられない。

後から現れて、敵を脅かしたのは、松前小彌太である。彼はこの邊の地理を、そらんじてゐた。かたはらを大和川が流れてゐる蒲生堤は、前年の冬激戦のあつたところだ。

小彌太は、この戦に参加してゐる。それ故、戦ひなれぬ秀頼の近臣等のやうな、どちはふまない。彼は一定の距離をおき、見え隠れに一行の跡をつけてきた。

敵の一人は彼の槍の穂先に、首を半分ちぎられて倒れた。他の一人は、眞向から頭をうち割られてゐる。

残つた三人が小彌太にむかつてきた。他の二人は、秀頼の家人と戦つてゐる。もう一人は女達をすてて、國松の後を追ひかけて行つた。小彌太は、それも見遁さなかつた。實戦、ずれた小彌太の戦ひぶりは、無二無三に敵の唯中